

特別支援教室主任の経営感覚を研く

東京都公立学校情緒障害教育研究会会長  
狛江市立狛江第三小学校長 渡辺秀貴



特別支援教室体制がスタートして一年が経過し、成果とともに課題も明らかになっています。自校内で支援を受けることができる環境整備が進み、希望する児童・保護者が増加していることは、まさに本制度の成果と言えるでしょう。

一方で、巡回指導を担当する教員の指導スキルの向上が急務であることが明確になっています。今年度当初、本会が実施した調査結果でも、「教職経験年数五年未満の教員が約八割」と、巡回指導担当の教員構成の現状が報告されています。

また、拠点校から複数の巡回先の学校に教員が出向き、その学校の管理職をはじめ関係者との関係性を築くには、膨大なエネルギーと調整力などのスキルが求められます。特別支援教育コーディネーターや養護教諭、スクールカウンセラーや、対象児童に深く関わっている担任と行動連携できる「力」は、そう簡単に身

に付けられるものではありません。

そこで、この課題解決のキーマンとなるのが、実質的に特別支援教室経営を担っている「主任」です。従来の通級指導学級内の関係者との調整という枠が、他校の教職員や関係者との関係性の構築と、一気にその質と量が広がっているのです。さらに、経験年数の浅い教員にもそのスキルを指導し、複数の学校の状況をよりよくコントロールすることまで求められています。つまり、拠点校の「主任」は、これまでに無い新しい経営領域に立ち向かっていると言えます。

拠点校、巡回受け入れ校にかかわらず、各校の校長は、この状況を経営課題の一つとして強く意識する必要があります。副校長や主幹教諭とも、この課題と解決策を共有しておきたいものです。拠点校の管理職は、特別支援教室の「主任」の経営力向上について、また、巡回受け入れ校

では、その現状を踏まえた拠点校の教員のよりよい受け入れ体制を整えることに、手だてを講じる時なのです。

組織力を一層強化する

平成二十九年度は、先述の課題解決を中心に、自閉症・情緒障害教育の研究・研修体制の一層の強化を図る年とします。各ブロックを統括する副会長の校長先生、そしてブロック担当の校長先生方には、さらに高い見識と強いリーダーシップを発揮し、数年後を見据えた人材育成にご尽力いただきますようお願いいたします。

◎各ブロックを統括する副会長

東ブロック

江戸川区立東葛西小学校

佐藤 友信 校長

北ブロック

練馬区立旭丘小学校

野田 豊 校長

北区立八幡小学校

市川 由紀絵校長

南ブロック

世田谷区立玉川小学校

片山 裕治 校長

多摩南ブロック

府中市立府中第三小学校

宇都宮 聡 校長

多摩北ブロック

昭島市立つじが丘小学校

上田 祥市 校長  
中学校、自閉症・情緒障害固定学級担当

国立市立国立第二小学校  
小林 理人 校長

全国情緒障害教育研究協議会  
全情研五十周年記念東京大会

間もなくの七月二十六、二十七日の三日間、自閉症・情緒障害教育研究の全国大会が東京（帝京平成大学）で実施されます。六月中旬ですでに九百人を超える参加申し込みがあり、最先端の研究成果を学びたいという教員の高いニーズがこの数にも反映されています。全情研の中村雅子会長、大会実行委員長の宇都宮聡校長のリーダーシップの下、野田豊校長が大会運営の陣頭指揮をとり、各地区で活躍している教員がチームを作って準備を進めてきました。校務に加えて、大規模な大会の運営に力を注ぐ校長や教員の熱意・眼差しの先には、「全ての子供が生き生きと学校生活を送る環境づくり」があります。

この全国大会は、本会の研究活動の活性化と組織の強化に直結しています。同時に、特別支援教室体制下でスキルアップを自ら求めている教員の、学びと成長のチャンスでもあります。都情研の運営スタッフ総がかりで力を尽くしてまいります。

## 平成二十九年都情研定期總會記念講演（抄録） 発達障害のある青年・成人の課題から学校教育を考える

～児童生徒の将来を見通した特別支援教育とは～

早稲田大学大学院教職研究科・保健センター学生相談室

長岡 恵理先生

CotoCo 研究所信濃支部長

月岡タツミ先生

講演では、発達障害のある青年・成人の課題や支援について前半部分を長岡恵理先生に、後半部分を月岡タツミ先生に分かりやすくお話していただきました。紙面に限りがあるため、お話のかなりの部分を割愛せざるを得ず、誠に残念です。それでも、とても示唆に富む内容ですので、最後までお読みいただき、今後の指導に生かしていただければと願っています。

（広報担当）

### 一 「自立と自律」の支援

自立・自律を支援するということは、自らが自分を律して社会生活を営むようになるのを支援するということです。それには四つのポイントがあります。一つ目は、自己理解です。思い込みから脱却して「考え直す」ことを学ぶことです。二つ目は、自己主張です。意見をもつこと、意見を表明するときには相手に分かるように伝えること、相手に通じる表

現を選ぶこと、場合によっては「表現しない」という選択もできるように

なることです。そして三つ目は問題解決です。誰かが肩代わりして解決してくれるわけにはいきません。自分が主体であることを自覚して能動的に取り組む姿勢と解決するためのスキルを習得すること、自分をコントロールして努力できるようにすることが必要です。四つ目は、「分からないこと」や「できないこと」に配慮や支援を積極的に求める支援希求力です。このような力が育ち自分でできるが増えれば相対的に支援は減っていきますので、生き方の選択肢は広がります。これが自立・自律支援だと私は考えています。

### 二 発達障害のある青年が直面する問題

青年が直面する問題は、発達障害があってもなくても同じです。誰とどこで何を生きているかという課題です。学生から社会人、労働者への移行には高い壁があります。や

りたいこと・やりたくないこと、できること・できないこと、向いていること・不向きなこと、認められること・認められないこと、これらについて社会的体験を通して理解し、他者からの評価を得て自己理解を深めていくプロセスが必ず必要になります。

平成二十七年年度の調査では、大学・短大・高専の高等教育機関に在籍する障害のある学生数は全学生数の0.68%です。内訳は、最も多いのが病弱・虚弱の学生で約三十%、次いで精神障害の学生が約二十七%、発達障害の学生が約十六%となっております。発達障害（診断書有）の学生は年々増加しています。統計を取り始めた平成十八年度は百二十七人と驚くほど少なかったのですが、十年経ち三千四百四十二人と二十七倍を超える数になっています。発達障害のある学生の内訳では、ASD（自閉症スペクトラム）が最多です。障害学生の多くが配慮・支援を受けています。診断書がある発達障害学生の進路ですが、最高年次の学生の中で卒業する人は約七割です。その中で就職する人は三割以下です。「その他」に属する人、すなわち進学も就職もしていない人が約四割を占めます。卒業はしたけれど、次の入り口につながっていない人が多いということです。診断書はないものの配慮を受けている学生に

ついても同じことが言えます。つまり、就労移行期に課題があるということは明確です。

### 三 就労移行期の課題

就労移行期の中心課題は「自己理解」であると指摘されています。障害を受け止める機会がまままま就職活動を行い、就職に失敗する、就職後の職場適応で失敗するといった経験を通して、障害と向き合うことになった場合は深刻です。職業の選択肢として障害者のための雇用制度があることを知らない、知っていても選択しないなどの理由によって、支援を利用するまでに長期に渡って失敗や挫折を繰り返す人が少なくないことも指摘されています。就労移行期にさしかかっているから、診断、障害受容、手帳取得、障害者雇用と向き合い、受け入れるには想像を超える困難を伴います。ですから、発達障害にかかわる人が節目節目で将来を見通した進路選択の情報提供や助言を行うことが重要です。

就労移行では、働く意思と働くことの意味（労働の対価として給料を得ることの意味）を分かっているか、そして障害を含む自分の特性について理解する自己理解ができていないか、自己理解をしようとしているかが問われます。働くことの意味、働くことの意味は、就労期になっても突然分かることなく、幼少期から

の積み重ねの中で徐々に明確になってくるものです。また、働きたいと思っても働くことの理解が不十分な場合、就労後に不適切な行動をとってしまうことがあります。例えば、周囲が忙しく働いているのに、自分の仕事が終わったら好きなことをしているとか、失敗したときに叱らずやさしく励ましてほしいと期待するといったことが、不適切な行動として報告されています。これまでそれで通用していたのでしょうか。子供たちがこのような勘違いをしたまま世の中に出ることがないように、指導・支援をしていただきたいと思います。

職業準備性のピラミッドについてお話しします。基本的労働習慣を支えているのは、健康管理、日常生活管理、基本的な対人スキルの三本柱です。土台である健康管理、体調管理は難題です。ASDの人は、感覚、運動、身体の問題がどれほど社会生活の足を引っ張っているかを知らずに生活していることがあります。生まれてからずっとそうだったので、理由も分からず辛い状態が長く続いているのです。感覚過敏からどうやって身を守るかは社会参加に大きくかわります。疲れに気付けない、疲れたからちよつと休もうという感覚が分からない人もとても多くいます。体調を維持するコツを小さい頃から学んでほしいと思います。日常

生活管理は生活リズムの維持が基本であり、日常生活動作のほとんどはルーティンワークで成り立っています。日常のやるべきことを幼少期から丹念に積み上げていくことが大きな自信につながりますし、生活の枠組みを整えることにもなります。

過集中で悩んでいる人も多くおられます。好きなことには二日も三日も寝ないで食べないでも平気で、でもその後、バタツと倒れてしまうのです。切り替える、切り上げるのは難しいことでしょうが、コツをつかんでほしいと思います。コツの習得には時間がかかりますので、小さい頃から取り組んでほしいと思います。

対人技能、コミュニケーションスキルは、感情のコントロールが中心になると思います。自分の感情を整理することは一人ではできません。指導している子供たちと、これはどういう気持ちなのか、どうしてこういう気持ちになるのか、どうすれば気持ちを立て直せるのか、一緒に考えて、コツを学べるようにしていただきたいと思います。コミュニケーションスキルの上に、基本的労働習慣やビジネスマナーが構築されていきます。報告・連絡・相談、規則遵守も日常生活の延長線上にあることです。

体力の問題で自立の足を引っ張られる人もとても多いと実感していま

す。過剰な感覚情報、趣旨不明な出来事、意図不明な発言など、訳が分からない問題が多過ぎるので、処理が追いつかずにエネルギーを奪われてしまつて、せつかく持っている能力を発揮する余力を失っている人が多いのです。一日七、八時間、週五日働ける体力を温存するために、日常生活の負担を減らすコツを小さい頃から見つけていってほしいと思います。職業適性はその上に乗ってきます。小中学校段階はボトムアップが可能な時期ですので、ぜひ、ご指導いただきたいと思います。

#### 四 高等教育機関における支援の課題

高等教育機関で就労後に必要なスキルについての支援が充実しているかと言えば、そうでもありません。支援の実施率は半数に満たないものです。しかし、企業が新規採用時に重要視するコミュニケーションスキル、ビジネスマナーなどは、就労後に初めて課題になるわけではなく、それまでの日常生活や学校生活の中で当然必要とされてきたもののはずです。ですから、将来必要となることを自覚して生活してきたかどうか問われるのだと思います。また、適切な就労支援機関へのつなぎや就労に関する情報がない状態ですと、必要な支援を十分に受けられない、あるいは受けようと思いません、進

学も就職も選択しない、あるいはできず、在宅等になってしまう人はなかなか減らないのではないかと懸念しています。

一方で、学生を続ける人の問題もあると思っています。大学にとつては、できるだけ中退を避けた現状があります。学生も知的好奇心が旺盛なので、消費者感覚で自分の満足をとことん追求して、結果として自立を先送りしてしまうことがあります。学校と学生双方の事情が相まって、長期間、複数大学の入学・休学・卒業を繰り返している人もいます。学歴が長いので知識は豊富になりますが、幼少期からの社会参加経験が少ないと社会参加の経験値が高まらず、年々社会適応が難しくなつてしまつてはいませんかと思つています。

#### 五 主な雇用支援策

雇用の支援策はいろいろとあります。発達障害を対象とする支援策には、ハローワークの若年コミュニケーション能力要支援者就職プログラム、地域障害者職業センターの体系的支援プログラムなどがあります。発達障害に特化されていないけれど利用できるものとして、ハローワークの職業相談・職業紹介、トライアル雇用、障害者就業・生活支援センター事業などがあります。ほかにも様々な支援がありますが、在学中に全てを利用できるわけでは

ありません。希望者が多いのが、障害者就労移行支援事業所です。民間ですが公費投入されており、多くの場合、利用料の自己負担がありません。ただし、卒業見込みが立っている、あるいは就職が決まったら中退するという人しか利用できないのが実態です。制度は変わる可能性があります。ぜひ最新の情報を入手して、必要に応じて提供していただきたいと思えます。

## 六 支援・配慮の目的…社会で生きる力を育てる

「手厚い支援」とはどういう支援なのだろうと考えることが多くなってきました。例えば、「やってあげることから、きみはやらなくていいよ」という対応は優しく見えますが、その人の能力が信頼されていません。どうしてもやらざるを一緒に考えてもらえていないのです。「ぼくは人參が嫌いなので、家のカレーには人參が入っていません」と言う人がいます。これは誰かの我慢の上に自分の生活が成り立っている、ということとです。「ほかの人なら許さないけれど、きみは特別だ」と言われ続けられてきた人もいます。成長する可能性を信頼されていません。このような対応では、社会で通用する実力は育ちません。

社会で生きるためには二つのジリツが必要で、一つは、自分の力を

發揮して生活を営む「自立」、もう一つは、状況に対応するために自分をコントロールする「自律」です。二つのジリツには、自分に必要な情報を選んで活用すること、できることは努力して、できないことは支援を求めること、そのようにして社会活動に参加しながら、自己理解と他者理解を深めていくことが必要です。

他者との協働も必要です。自分一人で自己理解も他者理解もできるはずはありません。仲間と協働しながら、周りの人が何を考えているのかを理解して、自分の役割を見つけて、どうすれば役割を務められるかを学んで、自分の責任を果たす達成感を味わってほしいと願っています。

「発達」とは、どのような力が育つことでしょうか。自分が今置かれている環境で生き抜く力と、自分が生きていく環境をよりよくしていく力が育つこと、と私は考えています。そのためには、どういう自分になりたいのかを思い描けること、他者の視点で自分を捉え直す自己理解の作業が必要です。

自分がいることを喜ぶ人がいるという実感も欠かせません。自分ができることを人任せにせず、しなければならぬけれどできないときに放置しないで協力を求める積極的な態度、状況を把握して他の人がどうしているかを観察して取り入れる力、

自分の問題に向き合って解決していく主体性を、社会活動に参加することを通して積み重ねることで、守られている立場から自分の役割を担って誰かの役に立つ立場へと成長していく、つまり「自立・自律」していくことができると思えます。

私は学校で子供がジュースをこぼした場面を見かけました。その子は動揺して、誰々が前に立っていたからだと人のせいになり、コップが滑りやすかったからだと言いつつ大丈夫。いいんだよ」と言いつつ床を拭いていました。私はショックを受けました。「理由と方法を納得すれば学べる人です。悔しがって挽回するチャンスを作って、自分がしたことの責任をとらせてあげてください」と言いたいです。こういう対応をされ続けると、自分と世間を勘違いして、結果として周囲から疎まれて、面倒だからとスルーされる人になってしまわないかと心配になります。成長できるように指導していただきたいと思えます。最後に先生方をお願いします。一般社会で通用しないことは学ばせないでください。役割を見つけて責任を果たして貢献する喜びを実感できるように指導してください。その子がまだ發揮できていない力、周りから見れば問題行動の形で表しているかもしれないけれど、エネルギーの現れです

から、そこに可能性を見つけていることができるでしょう。信じて見つけて伸ばしてあげてください。そして、いじめや差別から本気で体を張って子供を守ってください。ASDの人たちには、日々、一人反省会を繰り返している人がどれほど多いか、驚くほどです。「なぜあのとき、あの人は笑ったのか。私が変わることを言ったからか」「なぜあの人は黙っていたのか。自分はいけないことをしたのだろうか」この世は訳がわからないことだらけ。出来事の一つ一つが腑に落ちなくて不安になって日夜悶々として、フラッシュバックのネタが増えていく。ASDの人の多くは「本気の人」たちです。どうかこの人たちを孤独にしないでください。理解し合える仲間に出会えるようにしてください。そして、先生方も孤立せず、実力を發揮できるように高め合える仲間を見つけてつながり合ってくださいと思います。

### CotoCo 研究所信濃支部長

月岡 タツミ先生

私は大学生になってからASD（自閉症スペクトラム）の診断を受け、その後、同年代の発達障害者の大学生にたくさん会ってきました。その経験の中から、ASDの人と付き合う時に注意して欲しいことをまとめてきました。

## 一 「この世に『フツー』の となんか無い」

発達障害に限らず少数派の人のことを考える時には「この世の中に『フツー』のことなんか無い」という大前提を確認することが大切です。『フツー』のこととか常識とか、いつの間にか共有したことになる文脈とか、みんなこうだからこうしよう、こうしたい、こうしなければならぬ、という思い込みの物差しは、少数派の存在を知らずに決めてあったり、無視してあったりします。ですから、その物差しで私たちをはかることはできません。無理やり物差しの範疇に押し込めようとすると、こちらの私たちにとっては何の根拠もなく理不尽な価値観によって無理を強いられる挙句、ダメ出しをされ続けられるということになります。そして、しばしば実質的に損をしたり、無駄に疲れたり、傷ついたりします。大変辛いことです。この物差しのことを社会的障壁と言います。そういう障壁、常識を取り払って、一人の人間同士、あなたと私として私たちと付き合ってみてください。

## 二 私たちの感覚は偏っています

本当にこの世界の感じ方が結構違っていろいろあります。視覚も聴覚も嗅覚も味覚も痛覚も。すごく敏感なものから鈍感過ぎて身の危

険すら気付かないものまで、センサーの感度に大変バリエーションがあるらしいです。結果として、そのような五感の情報を受け取り過ぎて脳みそがパンクすることが非常に多いのです。しかし、その肝心な自分の脳みそのストレスのメータだけは、制御どころかモニタリングが苦手な場合が多くて、結果としてしょっちゅうパニックを起こしたり、あるいは本当に倒れてしまったりします。この感覚の個人差、全く思い当たらない人というのはいないのでないでしょうか。ご自分の何かしらの思い当たるものの延長線上に、しかし、とても遠いところにこの感覚の偏りというものがあるのだと思います。

## 三 能力も偏りまくっています

能力の偏りも激しいことが多いです。それも分かりやすい能力ばかりではなくて、意外なところとか、全体のバランスで見ると「えっこれ何かすごく不便だな」ということもあります。こういう能力の偏りは、しばしば感覚の偏りと影響を及ぼしています。結果として得意なものや苦手なもの、差がとんでもなく開いてしまったりとか、能力の落とし穴ができてしまったりするのです。苦手な感覚が足を引っ張るといってもあります。一度に二つのことができ

ないというのは、よく聞くと思うのですが、それは、頭の中のラインが何かしら常に感覚に占拠されていて、「ラインが足りない」という状態になっているのだと思われれます。大事なのは、得意なものにはひたすらヨイショしてどんどん伸ばしていくということ。苦手なものに関してはあまり深追いしない。努力の傾斜配分をすることです。苦手なものに努力をすぎ込んでもあまりましになっただけのことではありません。それだつたらその分の時間と気力で得意なことをたくさんやらせてください。能力が偏っているというのは、駄目なことではなくて、スペシャリストになる可能性があるということでもあるのです。それに、体力とか感覚で疲労やストレスがオーバフローしやすいので、気力、体力はとても有限です。是非最もつき込み甲斐のあるところに力を入れてください。苦手なところをどうしてもどうにかしたいという場合は、色々な道具や工夫を外付けして対応してくださる方が良いと思います。タブレットから耳栓まで、眼鏡をかけるかのように己の一部として使っているのです。そういう便利グッズの情報を集めておいてもらえると嬉しいですね。

## 四 「こだわり」について

正直、このこだわりに関しては、

「他の人から見るとそんなになってるんだ」という程度の話です。先程も言ったように私たちは能力や感覚の違いがあるのが基本ですし、しかもそれは生まれてからずっと見えている世界な訳で、自分にとつては別に何でも何でもないのです。自分に認識できるものの中から好きなものを判定してそこに行くというだけのことなのです。恐らく、普通の人がつまり定型発達の人たちというのは、発達していく上で一番自然に興味関心をもっていく対象は自分の周りの人間です。それに対して私たちは何故か自然な興味の対象が人間以外のところに行くことがままあります。それは同時に人間についての興味が二の次になってしまおうということなので、そこに違和感があるのでしょう。このこだわりに関しては幾つもの要素がかかわっているようなので、あまり余計な手出しはしないで、長い目で見た方が無難だと思います。

## 五 「コミュニケーション」について

一番複雑にいろいろな要素が絡み合っていて一概には言えないというのが社会的コミュニケーション能力というものです。このことについて私が思い当たる要素は二つです。

一つ目は、言語ではなくて非言語コミュニケーション情報の発信、受

信のミス、すれ違いが起きているという事です。私たちの方は、感覚の偏りによってそれを上手く受け取れないし、上手く覚えられないし、その重要性について知ることもないのです。けれども、定型発達の人たちはこの非言語情報をすごく無意識で操ります。人の仕草や顔の動き、

何かしているなど思うし、何か情報がかつちに来ているぞというのを知識としては知っているけれど、読めない暗号ばかりに感じます。実は感覚の偏り具合によって、その非言語情報がノイズの塊、ちょっと怖いものに見えていることもあります。空気を読む、察する、言っていることと実際の意図が違うなどのハイレベルな人間的な技術については、ついていくことができないと思います。もしどうしても正確に伝えたいことがありましたら、5W1Hの条件を明示した上で、私たちの能力の中で、そちらと共通の規格が運良く採用されているルートをお使いください。お願いします。

二つ目は、最初に話した世間の常識やコンテンツ、文脈を共有していない、厳密には共有しているかどうかを確認しているのをさぼったために、コミュニケーションがうまくいかないということです。これに関しては言語とかボディランゲージとか世界の見え方が全く違う文化圏から来た人だと思っただけという

のが、具体的な想像としては割と妥当だと思います。そのような文化的な違い、そこからくる勘違いや失敗を何とかするためには、時間も手間もかかりますけれども、逐一何事も確認するしかないし、お互いのことをよく知るしかないと思うのです。

## 六 「二次障害」について

私たちはいろいろややこしい前提条件の中で何とか日々の暮らしを送っています。こんな生活をしていると、否応なしにストレスが溜まります。このストレスからくる心身の不調が二次障害だと思ってください。一言で言う二次障害というのは不適応の表現なのです。この世界は、定型発達の人を基準にできているので、多数決でどうしてもそうなるので、少数派はどんなに不便でもそれを使わざるを得ません。そして自分に合わないもので、どんどんどんどん疲れていきます。24時間365日10cmのハイヒールで過ごしてくださいと言われるら、外反母趾になりますよね。外反母趾はこの場合二次障害だと思ってください。例えば、高速道路に乗って出張行ってくださいという時にショベルカーが出てきたら、これは無理ですね。スピードは出ないし、道路の表面が剥がれるし、事故になります。この大変合わない社会に対して環境調整を取り入れることで、

私たちも何とか安定して生活しているのかも知れないのです。感覚の偏りをどうにかして補うのも広義の環境調整のうちです。例えば、休憩を多めに取りつつこなししていくというのもありですし、やかましいクローラーの近くの席に座らないとか、狭くて静かな別室でテストするとか、時間にちよつとだけ融通を利かせてその分しっかりとテストをするというのもありです。

## 七 まとめ

ひよつとしたら、なるべく多くの人たちにとって暮らしやすい環境を作ってください。それは周りにいる人が私たちのことをちゃんと知っていて、分かりづらいのだけれども、普段から結構いろいろ負担を引き受けているということを知っていて、ぱつと見、ちよつと変な奴だったりするけれども、違うなりに、ああいう奴なんだって存在を認めてくれて、そして私たちとそちら側とのどちらかに負担が偏らないような上手な付き合い方のコツを知っている、そういう人がたくさんいる場所が増えればOKなのです。例えば、皆さんの教室にいるあの子たちに私たちのことを知ってもらおうとしたらどうでしょうか。出席番号一番のあの子と私。一番足が速いあの子と私。クラスのリーダーキャラのあの子と私。

隣に教科書見せてと頼みたい時は、どういうふうに頼むのが一番お互いびつくりしないで済むのか。いかがでしょうか。できそうでしょうか。嫌だとは言えないですよ、インクルーシブとはこういうものですかね。違うのだけれども具沢山の味噌汁みたいな何か一体なものとしてやっていくということです。すごく時間がかかることです。でもそれは、なるべく多くの人たちが何とか暮らしていくために必要なコストだと思っただけでしかありません。それに、いろいろな場所がそういう環境になつていけば、ASDの人と付き合いやすくなるのか、暮らしやすくなる場所が増えるはずですよ。

## 編集後記

広報に関するご意見、ご感想がありましたらお寄せください。

編集・発行 企画運営本部 広報担当  
各プロック 広報係

世田谷立深沢小学校  
〒03-3428-8931  
印刷 ㈱ワールドミーティング